

## 口永良部島の地域経営と郷土資料保存のあり方 —学校施設利用と火山被災地事例—

長嶋俊介

鹿児島大学多島圏研究センター

### The Community Governance of Kuchino-erabujima Island and the Preservation of Local References and Artifacts

- A Case of Areas Affected by Volcanic Activities and the Use of School Facilities

NAGASHIMA Shunsuke

Research Centre for the Pacific Islands, Kagoshima University

**要旨：**この島は火山災害の島であり、硫黄鉱山の島であり、急激な過疎化の島である。その社会がどう動いたのか。既存外部データ・地図で補いつつ、現場確認などを行った。そして、それら作業の延長で、ある種理想的な、現場資料保存・開示の事例に接した。小中学繋ぎ廊下資料館（以下「資料館」）の所在である。考古学資料・生活生産道具・動物剥製・文献展示保持である。口永良部事例は、資料館を持ってない小型島嶼での島研究力・郷土教育力確保の、重要参考事例となる。

**Abstract:** The Kuchino-erabujima Island has an active volcano, which has caused devastation to the island throughout its history, and it also has a sulphur mine. The island has been suffering from rapid depopulation- an added problem to its small population. How has this society changed? Unfortunately there is little record of formal island history; its main record is not held on even in a bigger neighbouring island. Therefore, we investigated the social mobility through pre-existing external data and maps with on-site verifications. We demonstrate a case of an idealistic preservation and display of resources in this paper: the “Resource Centre” located along the corridor of the local elementary/junior high school. It displays and preserves archaeological resources, tools, animal stuffing, and local literatures. This has shifted the handicaps away from small island researchers of having limited resources. The case of Kuchino-erabujima Island provides an important example for small islands without resource centres: this empowers present and future generations to engage in their life-long education of their own homeland as well as for island researchers.

#### 1 はじめに

##### データ・資料蓄積：郷土教育力過疎

公式の郷土資料本である『上屋久町郷土誌』1984年で、属島口永良部島の関連頁を調べて、その分量・言及幅のあまりの少なさに驚愕した。平成の大合併で、旧集落レベル

か旧市町村単位の歴史・データの蓄積のあり方が問われ始めている。特に本土と合併した島嶼、あるいは中規模島の属島では深刻である。小規模島嶼の連続である、トカラ列島内でも、中ノ島以外には、資料館がない。島に行って島のことを知るに、本土（本島）に行くか別の島（本島ではない別島）に行かないと解決しない。問題は、本島にも本土にも、地元の島にも、郷土資料（基地及び体系図書）がないということが各島で問題になりつつある。

この島は火山災害の島であり、硫黄鉱山の島であり、急激な過疎化の島である。その社会がどう動いたのか。既存外部データ・地図で補いつつ、現場確認などを行った。そして、それら作業の延長で、ある種理想的な、現場資料保存・開示の事例に接した。小中学繋ぎ廊下資料館（以下「資料館」）の所在である。考古学資料・生活生産道具・動物剥製・文献展示保持である。口永良部事例は、資料館を持ってない、小型島嶼での島研究力・郷土教育力確保の、重要参考事例となる。

### データの所在

外部データ：前述郷土誌は1018頁である。遺跡・島集落地図・村落単位データ・動植物関係を除くと、「口永良部島支所設置」pp.363-365, 「火山爆発」「災害対策」pp.705-707, 「民謡」pp.982-986の計11頁のみである。極端に言えば3桁に届く落差である。嘗ての分村運動（この11頁のうち1.5頁も割いている）の後遺症でないにしても、屋久島郷土研究者の所掌枠外であれば、構造的問題だともいえる。

全国島嶼関連データ以外では、根岸泉『南の島へ行かないか－離島の中の離島口永良部島－』南日本新聞開発センター1997年139頁は、16年間通い詰めた東京の教師が実生活と行政との関わり合いも含めてきちんと書かれた貴重な「考現学的」文献である。また下野敏見氏書著作で断片的ながら、民俗・歴史・フィールド記述があり貴重である。

他は、旅行記的なものである。そのいみでも、「資料館」の、データ・文献（原資料コピーなど）は貴重である。島で島の良質データと接することが出来る希な事例である。

## 2 火山被災地

死者も出る大災害地でありながらも、先述資料では、実質2頁分しか記載がない。理科年表等で補うと、噴火は以下ようになる。

1841年二度噴火。老女1人死亡。元村は神社・津城跡・背後に権現山がある歴史のある集落であったが全焼し、本村へ全戸移転。1914年大量硫黄噴出。1931-34年水蒸気爆発は34年硫黄島噴火との連動とされている。1931年新火口2カ所。6家倒壊数名傷者。向江浜・本村の2集落210戸1185人避難。1933-34年七釜地区壊滅。33年に砂迫が全滅し、34年に地区全体が消滅（15戸焼失、死亡8人、傷者26人）。1945年割れ目噴火ただし被害はなかった。1966年水蒸気爆発・噴石被害傷者3人家屋一部損壊6棟山林被害10ha。68年2度、69,72,73年（ガス噴出）。76年地震多発。1980年噴石・降灰。2地区30名一時避難。被害無し。京都大学桜島観測所は水蒸気爆発などで地震があっても心配ないと発表。82年4噴気孔発生。

今も活発に活動を続け、噴石対策避難壕が島内各所にある。[現在の活動・防災などは木下論文に譲るとして] 被災地向江浜は、古岳の硫黄鉱石加工施設のあった場所である。同地区・七釜集落は新岳産精錬所があった。その両地区現場と聞き取りをした[他に後述資料も発見したのでここでは記載しない]。石が熱く焼け死んだ人もあった。避難場所・方法・訓練も未熟であった。係る被害があり続けながら、1980年代まで噴石対策もなされず放置されてきた事実は、重く記憶しておく必要がある。



写真1. 七釜集落：1966年火山弾被害後廃村となった



写真2. 火山ガス測定装置と避難施設

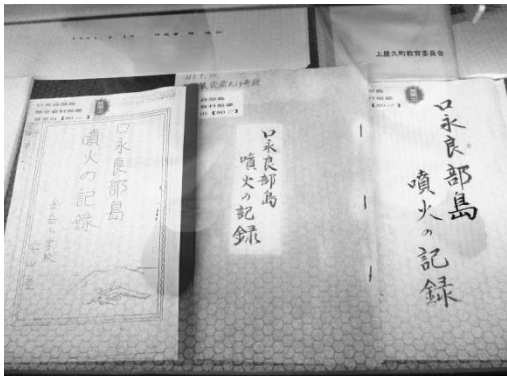


写真3. 公刊・復刻を願いたい貴重文献である。資料館蔵

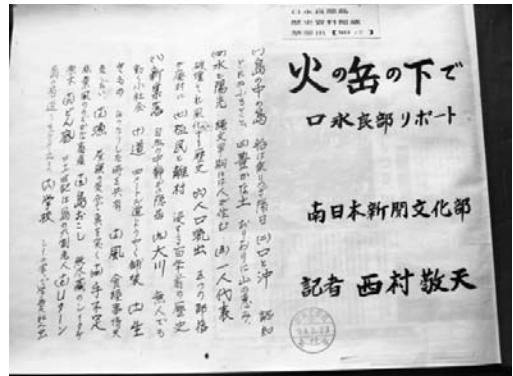


写真4. 得難い新聞連載が現地で閲覧出来た。